

# Funai Overseas Scholarship 留学報告書

2015年11月 宮武平

2015年8月より米国ハーバード大学大学院にて機械工学を学んでいる宮武平と申します。今回の報告書では、ここまでのハーバードでの生活について述べたいと思います。

## ハーバード・ケンブリッジでの生活

ハーバード大学はマサチューセッツ州の、ボストン市とは川を隔てた北隣りのケンブリッジ市に位置しています。マサチューセッツ州はピルグリム・ファーザーズがメイ・フラワー号に乗って上陸し、その後続々とピューリタンが入植を始めた土地であり、“アメリカ史”が始まった土地といえます。そのマサチューセッツ州の中でもボストンは政治・経済・文化の中心的な役割を果たして来た都市であり、アメリカの大都市の中では珍しく、至る所で歴史の匂いを感じ取ることができます。そんな「アメリカ最古の〇〇」には事欠かないボストン都市圏において、ハーバード大学も例に漏れず、アメリカで最初の高等教育機関として1636年に開学しています。アメリカ合衆国が独立した1776年より100年以上前の出来事です。

その後、アメリカの拡大と発展とともに政治的・経済的な存在感は相対的に薄れてきたボストンですが、現在では教育・医療・ハイテクの中心地としてのポジションを確立しています。固有名詞を列挙すると、ハーバード大学・マサチューセッツ工科大学(MIT)・タフツ大学・ボストン大学などの名門大学、マサチューセッツ総合病院・ボストン小児病院・ブリガム病院など全米有数のマンモス病院、ロボット系ではボストン・ダイナミクス社(パワフルな人型・四足歩行型ロボットで有名)やアイ・ロボット社(ルンバや軍事用ロボットで有名)などの企業が群居しています。ハーバード大学は、MITとの結び付きが特に強く、お互いの研究室への所属や授業の履修が認められており、キャンパス内でMIT生に出会うことも珍しくありません。また、私の所属する研究室はボストン大学やボストン小児病院との共同研究が盛んに行われています。他にも美術館・博物館や図書館などの施設や著名人による講演会などのイベントも人口では数倍の東京にも負けないくらい充実しています。中でも一番恩恵に預かっているのは、ハーバード構内にある東アジア研究所のYenching Instituteの図書館で、ここにはハードコアな専門書以外にも各種文学全集や漫画などを含めた約35万冊の日本語の蔵書があり、ここを訪れると日本語の活字への飢えを癒すことができます。

食生活については、ハーバード近辺には日本の食材が手に入るアジア系マーケットがあったり、ラーメンや焼肉の日本の有名チェーン店が出店していたり、定食屋があったりと、悪くない環境です。ただ、ラーメン一杯がチップ込みで1500円以上するほど高く、大抵行列ができていますので毎日食べに行くというわけにはいきません。また、寮に住んでいると大学院の食堂の週5回分のミールプランに強制的に加入させられます。最初のうちは食べ放題なので嬉々として食べていましたが、メニューは代わり映えせず、クオリティーも高いとは言えないので、今ではビタミン摂取の場と割り切って大量にサラダとフルーツを食べています。また、この食堂は院生の社交の場としても機能しており、ここに通っていると自然と知人が増えていくので、少なくとも最初の一年は我慢して通おうと思っています。

寮は巨匠グロピウスの設計による“ありがたい”建築なのですが、寮生の間では古

い・無機質・狭い・壁が薄いともっばら不評です。私は線路に面した東京の狭いアパートや、週末になると四方から大音量の音楽が聴こえ時には近隣から大麻が臭ってくるロサンゼルスのアパートなどで様々な住環境とノイズに対する耐性ができたためか、そこまで不快や不便を感じることなく暮らせています。どうやらアメリカの庭付きの一軒家で生まれ育った人たちにはここは牢獄のように感じるらしいです。

### English Learning Program (ELP)

ハーバードの大学院(Graduate School of Arts and Sciences)では、留学生の新生のうちTOEFL iBTのスピーキングが26/30点に達していない人を対象に秋学期が始まる前の1ヶ月間に英語の特別講習(ELP)を受けることを推奨しています。私はTOEFLスピーキングの点数はクリアしていましたが、アカデミックライティングに自信がなかったためELPへの参加を懇願し、参加を認めて貰うことができました。プログラムは非常に充実したもので、毎日朝から夕方まで少人数での授業があり、毎日大量の読書課題が出ました。参加者は文系・理系両方いましたが、教材はプラトンからオーウェルから最新の科学論文まで多岐に渡り、授業では読書内容に基づいて議論したり、プレゼンやエッセーの発表がありました。あまりにも大量に、背景知識を持っていない分野も含めた課題が出たため全てを納得するまで消化しきることは出来ませんでしたが、大学院の課程が始まる前に大量の英文に触れ、英語を話し書くトレーニングを受けることで語学に関する不安はある程度拭うことができました。また、多様な専門と出身地の同級生たちと様々な話題に関して教えあったり、議論したり、寮で協力しながら徹夜で課題をしたりできたのは非常に贅沢な経験でした。ELP終了後も、ELP参加者たちとは定期的と一緒にご飯を食べに行く仲が続いており、異国での留學生活の楽しみや苦勞を共有しています。

### 授業

当初はMITで授業を取ることも考えたのですが、最初の学期はハーバードに腰を据えて慣れようと考え、ハーバードで機械系の授業を1つ、応用数学の授業を1つ履修しています。日本の授業との大きな違いは1つ1つの授業が週に複数回あり、宿題の量も多いことです。そのため時間を多く取られますが、演習問題をたくさん解いているので、理論だけでなく、研究などに応用が効く実用的なスキルも身につけているのを感じます。また、数人でチームを組んで取り組むプロジェクトがいくつかありました。そこで組んだ同級生はチームで取り組む能力が非常に高く、プロジェクトのタスクの分割と振り分け方法・クラウドツールを使った進捗管理・メールの返信の早さなど見習うべきことが多く、一緒に働いていて非常に気持ちよかったです。

### 研究

研究室はBiodesign Labという所に属し、歩行アシストロボットの研究を行っています。研究室のメンバーは機械系以外にもバイオエンジニアリング・電気工学・理学療法・アパレルなど様々な専門の人がいて、そういうチームで働くのはお互い細かい話が通じない葛藤がありながらも、刺激に満ちています。また研究者とスタッフの役割が分かれており、PhD学生は研究者として振舞うことが求められています。一度、実験のために単純な回路を作ろうとしていたら「それは他の人にお願ひしなさい」と言われた時はカルチャーショックを受けました。

こうして振り返ってみると、渡米してからあっという間に約4ヶ月が経ってしまいました。忙しさに余裕を失うこともありましたが、学業と生活の基盤もやっと整ってきました。これからは成果が出せるように全力で頑張りたいと思います。最後になってしまいましたが、船井情報科学振興財団の皆様からのご支援に感謝申し上げます。